

50歳から住みたい  
地方ランキング

全国 4位  
過疎自治体 1位

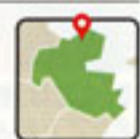
大分県  
豊後高田市

ふんごたかだし

# プラチナ通りは「生涯楽しいまち」 シニアの力が地域を盛り上げる

大分県豊後高田市は、多岐にわたるユニークな事業が奏功し、多くの移住者を集める注目のまち。若い世代はもちろん、シニア層も積極的に受け入れて入れていることも特徴だ。今回のランキングではそうした事業が高得点に結びつき、人口2万3000人の過疎自治体でありながら全国4位に輝いた。

大分県豊後高田市  
人口 2万3270人  
高齢化率 37%  
面積 206.24km<sup>2</sup>  
平均気温 1月/5.1℃  
8月/27.0℃

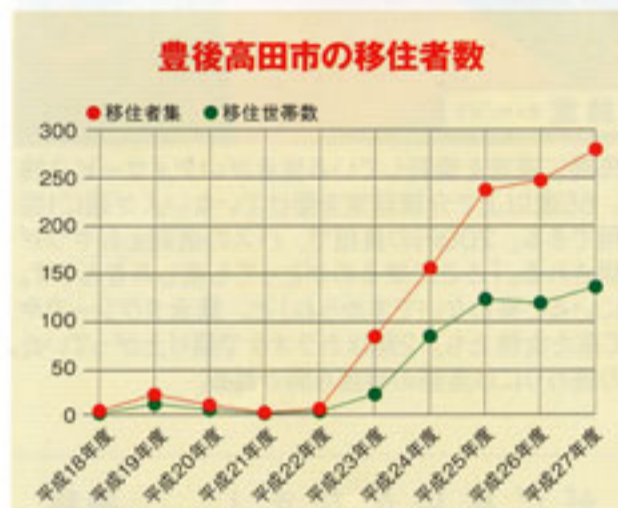


ランキング得点  
I=5/7 | IV=4/6 | VII=8/9  
II=3/5 | V=2/3 | 合計=38  
III=8/8 | VI=8/8

※項目I~VIの内容は83ページ参照  
国東半島の北西部に位置。かつて内  
海航路の拠点として栄えた。大分市  
まで約60km、北九州市まで約  
90km。大分空港からバスで約45分。  
日豊本線宇佐駅からバスで約10分。  
◎定住促進係  
☎0978-25-6392



豊後高田市では、「玉津プラチナ通り」を高齢者が楽しめる場所にすべく重点的に整備している。「2011年に最初につくったのが高齢者交流施設のプラチナ笑話館です」と永松市長。絵手紙や手話の会などに誰でも参加できる。



本誌「住みたい田舎」ベストランキングで、唯一第1回から4回連続してベスト3にランクイン中の豊後高田市。観光交流や企業誘致で成果を出し、移住に力を入れ始めたのは平成23年度。以来、上のグラフのように移住者が増え続け、過疎自治体でありながら、平成26年度、27年度と2年連続で社会増を達成した。



「あなたの夢を全力で応援します!」と定住促進係の安田文子さん(左)と大塚佳代さん。もめる。高齢者のニーズに合うので、ここを重点的に整備しています。市内を巡回する乗合タクシーが停まるので、高齢になっても出てこられます。家に引きこもっていないで、ここでおいしいものを食べましょう、友達と遊びましょう、好きなものを買っちゃおう、というわけです。今後は生活支援ハウスなどの交流居住施設もつくりたいと考えています」

玉津プラチナ通りには、人が集まる施設・仕掛が随所にある。若い世代が多い「夢まち城台」住宅団地(全66区画)とプラチナ通りを結ぶ道を広くする工事も進めている。数年後には、プラチナ通りで遊ぶ子どもの姿が、かつてのように日常的に見られるようになるだろう。プラチナ通りは豊後高田オリジナルのCRC、「生涯楽しいまち」になりそうだ。

豊後高田市には現在、移住に関連する事業が135あり、50歳以上に特化した今回のランキングでも4位にランクイン。「移住の豊後高田」の充実ぶりを印象づけたと言える。陣頭指揮を執るのが、合併前を含めて5期

目を務める永松博文市長(77歳)だ。「引きこもり傾向のある高齢者が楽しめる場所を、と整備しているのが玉津プラチナ通りです。私が子どものころは一番にぎわいのある商店街だったのですが、シャッター通りになっていきました。ただ近くには病院も歯科も図書館も公民館もある。そば屋



↑豊後高田が一番にぎわっていた昭和30年代の街並みを再現したのが「昭和の町」。年間40万人が訪れる。



↑豊後高田市では平成15年からそばの産地化に取り組み、現在では西日本トップクラスの作付け面積に。そば職人を養成し、認定店制度も創設。6月中旬に春そば解禁、10月下旬に秋そば解禁と、年に2回新そばが食べられる。



今年6月に地域おこし協力隊として横浜から移住した市川誠さん(59歳)と、妻の千穂さん(55歳)。「玉津プラチナ通り」の元パン屋を借りて暮らしている。町おこしにかかわりながら、どんな店にするかプランを練るそうだ。



ともに横浜から2014年に移住した隈田賢一さん(左、69歳)と松岡稔彦さん(69歳)は、アグリチャレンジスクール「直売所出荷コース 野菜・花き版」を受講中だ。同スクールは、年間受講料2000円(テキスト代込み)の農業塾で、ほかに新規就農コースもある。直売所などに出荷でき、「農業で汗を流して健康に! 年金+50万円ですとゆとりある生活を!」と呼びかけている。小菊などの花がよく売れるそうだ。

7年前は違った。夏は海水浴とキャンプでにぎわうが、それ以外は閑散としたのだ。仕掛け人は近藤哲彦さん(68歳)。長く流通業界に身を置いたが、54歳で退職して奈良県から旧香々地町に移住した。両親の介護のためだったという。「妻には仕事がありましたので、家を建てて1人で両親を8年間

介護して見送りました」それからは釣りを楽しみながら働いたら、と考えていたが、そうは間屋が卸さなかった。近藤さんが直売所の売り上げを2倍にしたと知った市長から呼び出され、キャンプ場の管理を直接依頼されたのだ。キャンプ場の周辺には、40年前からの耕作放棄地が広がっていた。2007年に地域有志で花による景観再生運動を始め、2010年にNPO法人長崎鼻B・Kネットを設立、地域の活性化をさらに一歩進めた。こうした取り組みは高く評価され、昨年、第25回全国花のまちづくりコンクールで最高賞となる「農林水産大臣賞」を受賞。今年、農業生産法人「油花」を設立し、オイルの生産を増強する。長崎鼻の活性化は大規模なだけに、行政との連携は重要だ。「都会の役所は届け出に向くくらいですが、ここでは市も県も身近です。なにせ市長がアポなしでよく来るんです。役場のレスポンスも非常に早い。豊後高田株式会社ですね」

当初、近藤さんを含めて2人だった職場は、今では15人になる。「妻もこちらに来て、レストランなどを手伝ってくれています。移住者呼び込むには、仕事の山谷を減らして安定した雇用にしなければなりません。後継者の育成も課題です」近藤さんは、ブルーベリー農家でもある。誰も手がけていない作物を、と独学し、前出の若竹治さんら地元有志とブルーベリー研究会を結成。現在は300本を育てる。高い品質なので引き合いが強く、パンやスイーツ用にも出荷している。夏になると近藤さんは、5時に起床してブルーベリー畑に出る。7時に家に戻って朝食をとる。7時半に出勤。17時に退社したその足で畑作業。19時に帰宅して20時に夕食。22時に就寝。「昔の会社でもこれくらい働いていたら、ずいぶん上まで行っただか」と笑う。「ただね、50歳、60歳になったら、都会は灰色で息苦しいですよ。定年後は、喫茶店に寄って散歩して、百貨店をぶらつくくらいしかやることがないでしょう。私には今、やる事が山ほどあります。1日が充実して終わりますよ」



↑海を望むレストラン「フィオーレ」では、搾油・加工施設「オイルラボ」で搾った花のオイルを使用。併設店舗「オリオ」ではオイルと加工品を販売している。



↑「恋人の聖地」に選定された「恋叶(こいかな)ロード」にも入っている長崎鼻。オノ・ヨーコの「見えないベンチ」をはじめとする現代アート作品も点在している。



↑長崎鼻の活性化に取り組む近藤さん。「このヒマワリからはオレイン酸が7割も含むオイルが搾れるんです。これからアマニの栽培も本格化させます」。